

『封陟』の改作

—『太平広記』から『酔翁談録』へ—

小松 建男

I 前 言

現在「話本」と呼ばれている中国近世の短編小説は、宋代の語り物から発展してきたものである。したがって「話本」について論ずるには、作品中にどの程度語り物の頃の古い要素、たとえば表現や内容、を残しているのかを明らかにして行く必要がある。元代に刊行された『酔翁談録』は、宋代の語り物の種本集として知られている。宋代の語り物を直接見聞できぬ現在となつては、「話本」に残る古い要素を知る上で『酔翁談録』は重要な資料といえよう。

『酔翁談録』に収められている作品の多くは、唐代の伝奇小説である。これらの作品は、『太平広記』に収められている原作と比較すると、本文がかなり節略され、時に原作と異なる本文や原作にはない語句をもつ。『酔翁談録』の編者は、作品の収録に当たっては、彼が生きていた時代の観客の好みや考え方を考慮に入れて、作品の選択と改作を行ったはずである。従つて、『酔翁談録』所収の作品の選択や改作から、逆に『酔翁談録』が刊行された頃の人々の好みや考え方を取り出せれば、これを「話本」の中の古い要素を探るための参考資料として利用できるはずである¹⁾。

このような見通しの下に、本論では『封陟』を例にとり、『酔翁談録』の編者の改作とはどのようなものであったのかについて考えてみたい。

II 『酔翁談録』が使用した資料

『酔翁談録』の編者が原作を、どのように改作したかについて論ずるためには、どこを『酔翁談録』の編者が書き換えたのか、その箇所をあらかじめ確認しておく必要がある。しかし、『酔翁談録』の編者がどのようなテキストを使用したのかはまだわかっていない²⁾。

そこで、『封陟』の四種の本文について対照表を作成してみた³⁾。使用したのは次の四種である。

1. 『封陟』『太平広記』（中華書局 1961）巻68（以下『太・封』と略称する）

2. 『封陟不従仙妹命』 『酔翁談録』 (古典文学出版社 1957) 己集巻2 (以下『酔・封』と略称する)
3. 『封陟』 『類説』 (芸文印書館 刊年不記) 巻32 (以下『類・封』と略称する)
4. 『封陟拒上元夫人』 『緑窓新話』 (古典文学出版社 1957) 巻上 (以下『緑・封』と略称する)

なお、これらの書物は年代順に配列すると、『太平広記』(北宋), 『類説』(南宋), 『緑窓新話』(南宋), 『酔翁談録』(元)の順になる。

この四種の本文を比較して、『酔翁談録』の編者が改作した箇所とそうではない箇所を弁別し、そこから彼が使用したテキストはどのようなものであったのかについて推測をしてみたい。

手順としては、はじめに『太・封』と『酔・封』の本文が一致しない箇所を抜き出す。次に抜き出した不一致箇所が、『類・封』や『緑・封』の本文ではどうなっているかを確認する。もし『類・封』や『緑・封』の本文が、『太・封』の本文と一致し、『酔・封』と一致しない時は、『酔翁談録』の編者が改作を行った箇所と考えることができる。逆に、『類・封』や『緑・封』の本文も、『酔・封』の本文と一致し、『太・封』と一致しない箇所があれば、それは『酔翁談録』の編者が改作するより前の段階で、既に『太・封』とは異なる本文になっていた箇所とみなすことができる。

まず『酔・封』の節略の方法は、長い原文を短く書き換える編集と、ある箇所全てを削る削除にわけられる。例1では、原作の前半“妹長吁曰”の前までは削除され、そのあとの台詞は、短く編集されている。

1) 太: 侍衛諫曰:「小娘子廻車。(15字略) 豈神仙配偶耶?」妹長吁曰:「我所以懇懇者,(14字略) 又須曠居六百年。不是細事。於戲此子大是忍人。又留詩曰:「(28字略)」輶軒出戸珠翠響空(11字略)。

酔: 仙妹嘆曰:「所以致懇者,(13字略) 又六百年。此子大是忍人。」又留詩曰:「(28字略)」

類: 妹嘆曰:「所以懇禱者,(13字略) 又六百年。此子大是忍人。」又留詩曰:「(28字略)」

緑: 侍衛謂妹曰:「小娘子廻車。豈神仙配偶耶?」輶軒出戸, 珠翠響空。

この例を見ると、『酔・封』と『類・封』の節略の仕方はよく似ている。ところが『緑・封』の節略の仕方は、『酔・封』や『類・封』と異なる。『酔・封』と『類・封』が削除した台詞を残す一方で、『酔・封』と『類・封』が残して

いる台詞や詩を削除している。

例2では『酔・封』と『類・封』は節略の仕方が全く同じ。一方『緑・封』は『酔・封』と『類・封』が削除した“俄有仙騎，召使者與囚俱來”を残している。

2) 太：俄有仙騎，召使者與囚俱來。陟至彼仰窺。

酔：陟仰視金輅中。

類：陟仰視金輅中。

緑：俄見仙騎，召使與囚俱來。陟仰窺。

次は、『酔・封』・『類・封』が、ともに原作では台詞になっている言葉を叙述の文にしている例。

3) 太：妹曰：「願不貯其深疑（12字略）後七日復來。」詩曰：「(28字略)」陟覽又不廻意。後七日夜，妹又至。

酔：後七日復來。又獻詩曰：「(28字略)」觀其詩了，陟又曰：「(48字略)」後七日夜，又至。

類：後七日復來。詩曰：「(28字略)」後七日夜，又至。

この場面“妹曰：「願不貯其深疑（12字略）」までを『酔・封』・『類・封』どちらも削除している。『緑・封』は引用した箇所全体が削除されており、ここでも『類・封』や『酔・封』と削除が一致しない。なお『酔・封』の途中にある“陟又曰：「(48字略)」”は、『酔・封』の増補した台詞。

『酔・封』と『類・封』の節略の仕方が一致や類似であるのは、この三例に限らない。『酔・封』と『類・封』の本文全体を比較してみても、両者の削除は一箇所を除きあとは全て一致する。また『酔・封』が原作を短く編集している箇所は、『類・封』でも同一か類似の文章に書き換えられている。もし一つの作品を二人の人間に節略させれば二つの異なった節略本ができるはずである。現に『緑・封』は『酔・封』と『類・封』どちらも異なった節略の仕方をしている。一、二箇所ならばともかく、一つの作品全体の節略の仕方がこれほど似ているのは、偶然の結果と考えられない。

これまでの本文の対照から、『酔・封』と『類・封』の本文は大変近い関係にあることがわかる。『酔翁談録』は『類説』よりも後に刊行されている。したがって、『類説』の編者が『酔・封』に近いテキストを利用したのではなく、『酔翁談録』の編者が『類・封』に近いテキストを利用したことになる。

では『酔翁談録』の編者が利用したテキストは、『類・封』にどの程度近いものであったのであろうか。

次の例4を見ると『酔翁談録』の編者が利用したテキストは、単に節略ばかりでなく、増補も『類・封』と共通するところがあったと思われる。

4) 太：又留詩曰：「(28字略)」輜駟出戸，珠翠響空。(11字略)後三年，陟染疾而終，爲太山所追。

酔：又留詩曰：「(28字略)」又曰：「好留住，他日相逢，悔之已暮。」後三年，陟病卒，爲太山所追。

類：又留詩曰：「(28字略)」乃云：「好住，好住。無異日追悔。」後三年，陟病卒，爲太山所追。

緑：輜駟出戸，珠翠響空。後二年，陟爲泰山所追。

『酔・封』と『類・封』には類似の増補文がみえるが、『緑・封』は増補していない。

この他にも増補と言うほどの長さではないが、次のような例もある。

5) 太：有封陟孝廉者，居於少室。

酔：封陟，字少登，居少室山。

類：封陟，居少室山。

緑：封陟，居於少室。

6) 太：良久蘇息。

酔：良久乃蘇息。

類：良久乃蘇息。

緑：良久蘇息。

『酔・封』と『類・封』の本文は、それぞれ“居少室山”(例5)，“乃蘇息”(例6)と書き換えられているが、『緑・封』は原作と同じ“居於少室”，“蘇息”である。また先に示した例2でも『酔・封』と『類・封』では、ともに“仰視金輅中”と書き換えられている箇所が、『緑・封』は原作の本文と同じ“仰窺”になっている。

ただし、『酔翁談録』の編者が『類・封』を利用したとすることは出来ない。例7は、唯一『酔・封』と『類・封』の間で削除が一致しない箇所である。『類・封』は『酔・封』が残している箇所を削除している。

7) 太：見一仙妹(26字略)正容斂衽而揖陟曰：「某籍本上仙，(114字略)特謁光容，願持箕箒。(9字略)」

酔：賭一仙妹淡粧近前願揖曰：「久聞美，願執箕箒。」

類：一仙妹願侍箕箒。

緑：賭一仙妹斂衽而揖曰：「某本上仙，(10字略)特謁光容，願侍箕箒。」

この例では、原作の台詞の一部“願侍箕箒”を『類・封』は叙述の文章に転用しているが、『酔・封』は原作どおり台詞になっている。

『酔翁談録』の編者が『類・封』の本文を見ていたとすれば、『酔・封』が『類・封』よりも原作に近い本文を残すことはないはずである。したがって、『酔翁談録』の編者が利用したテキストは『類・封』よりは削除の少ないテキストであったと推測される。

『酔・封』と『類・封』の本文が極めて似ているのは、偶然ではない。『太平広記』・『酔翁談録』・『類説』・『緑窓新話』の四本全てに収められている唐の伝奇小説は、あと五編ある。『太平広記』の題名で示せば、『裴航』、『柳毅』、『李娃伝』、『柳氏伝』、『無双伝』の五編である。この五編についても四種のテキストの本文を対照させてみると、『封陟』の場合と同じ結果がえられる。『酔翁談録』と『緑窓新話』の削除の仕方は一致せず、『酔翁談録』と『類説』の削除の仕方はほとんど一致している。但し『類説』が削除している箇所を『酔翁談録』が残している例、逆に『酔翁談録』が削除している箇所を『類説』が残している例、いずれも若干存在する。その数は、前者の例のほうが、後者の例よりも多い。

これらの事実から考えて、『類説』や『酔翁談録』に先行する書物、つまりこの両者の祖本が存在すると考えるべきであろう。その祖本は原作を節略したものであったはずである。さらに、この祖本は以下の二つの条件を満たすものであったと考えられる。まず『酔翁談録』と『類説』の間では、節略の仕方が数箇所異なることからみて、祖本は『酔翁談録』や『類説』の本文よりも削除はすくないものであった。次に例4のように『酔翁談録』や『類説』に共通する増補があることからみて、祖本は本文の増補も既に行っていた。

一方『酔翁談録』と『類説』は、祖本との間に以下の関係があると考えられる。まず、『類説』が削除している箇所を『酔翁談録』が残している例のほうが、『酔翁談録』が削除している箇所を『類説』が残している例よりも多い。このことからみて、『類説』は、この祖本を更に簡略化する傾向があり、『酔翁談録』は祖本の本文を削除することは少ない。次に『類・封』が増補した文は、『酔・封』にもあるが、逆に『酔・封』が増補した文は、『類・封』に無いものがある。このことから、『類・説』は独自の増補が無く、『酔翁談録』は祖本に無い独自の増補がある。

Ⅲ 新しく付け加えられたもの

この節では、前節の結果を利用して、『酔翁談録』が改作した箇所を見て行きたい。もし、『酔・封』の改作に一定の傾向が見出せるならば、そこに『酔翁談録』を編集した人間の意図を、読み取ることが可能なはずである。

まず『封陟』のストーリーはおおよそ次のようなものである。

主人公封陟のもとに仙女が結婚を望んで三度訪れ、その度に封陟に拒絶される。三年後封陟は死に、泰山へとつれて行かれる途中で、さきの仙女（上元夫人）の一行とであい、彼女に命を助けられる。生き返った後、封陟は以前のことを後悔する。

次に『酔翁談録』の編者が使用したテキストはどのようなものであったのかについて、『類・封』を利用しながら推定してみたい。『類・封』を見ると、物語が三度の訪問、泰山行き、蘇生の各場面で構成されているという点は、原作と変わっていない。また、上元夫人の詩は、三首全てを残している（『緑・封』は一首も残していない）。節略は、人物・風景の描写と台詞にめだっている。

仙女が訪ねてくる場面は『太・封』を見ると、三度とも、仙女の台詞、封陟の返事、仙女の台詞、仙女の詩、という組み立てになっている。『類・封』では、長い台詞が短く編集されているばかりでなく、台詞の数自体減らされている。一度目の訪問では、仙女の台詞が二つとも無くなり封陟の台詞だけが残され、二度目では、台詞は全て削除され一つも残っていない。三度目は、二度目までと異なる。仙女と封陟どちらの台詞も、短くなってはいるが皆残っている。更に、この場面の最後に「後で後悔しないように」と言う仙女の台詞を補っている（補われた台詞は、例4に挙げてある）。

続いて『酔翁談録』の編者が改作した箇所を確認しておく。『酔・封』と『類・封』の本文を比較すると、改作のうち主要なものは、以下に示す四箇所である。いずれも台詞の増補。このうち例8、9、11は封陟の台詞、例10は仙女の台詞である。

8) 太：陟（8字略）言曰：「某家本貞廉，（32字略）但自固窮，終不斯濫，必不敢當神仙降顧。斷意如此，幸早廻車。」

酔：陟曰：「君子固窮，寧敢思濫，請神仙廻車。無相瀆也。」

類：陟曰：「固窮，終不思濫，神仙幸早廻車。」

緑：陟正色曰：「某本孤介貞廉，不敢當神仙之命。」

この例8は仙女が初めて訪問してきた場面にある台詞。『酔・封』の増補は二箇所に分かれている。一箇所は『類・封』で“固窮”となっていて主語が不明であったものを、主語を補い、“君子固窮”としている。もう一箇所は台詞

の最後に“無相瀆也”を補っている。

9) 太：陟乃怒目而言曰：「我居書齋，不欺暗室，下惠爲證，叔子爲師。是何妖精，苦相凌逼？（16字略）」

醉：陟怒曰：「失身陷義，雖生奚益？ 我不欺暗室，何苦相陵？」

類：陟怒曰：「我不欺暗室。是何妖精，苦相凌逼？」

緑：陟又怒曰：「我不欺暗室。爾是何精妖，苦相凌逼？」

例9は仙女が三度目に訪ねて来た場面にある。“失身陷義，雖生奚益”が台詞のはじめに補われている。

10) 太：仙妹遂索追狀曰：「不能於此人無情。」遂索大筆判曰（以下略）

醉：夫人索追狀曰：「若論封陟無情，合與滅沒。然一見之日，不能忘情。」

乃以大筆判曰（以下略）

類：夫人索追狀曰：「不能無情。」以大筆判曰（以下略）

緑：妹索狀判曰（以下略）

例10は封陟が泰山へとつれて行かれる場面にある。台詞のはじめに、何故封陟を助ける気になったかを説明する台詞を補っている。

この例10までは、みな既存の台詞の前後に台詞を補うという増補の仕方である。次の例11はこれらと異なり「詩云……母勞再三。」全てが『醉・封』の増補。

11) 太：陟覽，又不廻意。後七日夜，妹又至。

醉：觀其詩了，陟又曰：「詩云：『娶妻如何，匪媒不得。』易曰：『君子非幣之交不親。』其所以然者，正欲名分之正也。今輒與仙妹講好，人其謂我何？ 母勞再三。」後七日，又至。

この例11は仙女が二度目に訪れてきた場面にある。仙女が詩を贈って帰ろうとするところ、つまりこの場面の一番最後に挿入されている。既に述べたように、原作では仙女が訪問してくる場面の構成は三度とも同じ。台詞が、仙女、封陟、仙女と続き、最後に仙女の詩がくると言う組立になっている。『醉翁談録』の編者は、原作のこのような構成に気づかなかったようである。

以上の増補の中から、まず例11をみてみたい。例11は、台詞全てが増補されたものであり、しかも『醉・封』の中で最も長い台詞である。このように、最も長い台詞を、わざわざ新たに挿入したのは、『醉翁談録』の編者にそれなりの意図があつたことと思われる。例11を見ると、儒教の經典を引きつつ、欲望に迷わされて道徳的に正しくない結婚をしてはいけない、と封陟に言わせ、彼が道徳的に潔癖であることを強調している。ここで、改めて他の増補に目をやると、例8では“無相瀆也”，例9では“失身陷義，雖生奚益”とやはり彼

の道徳的潔癖さが強調されており、『酔翁談録』の編者の増補には、一貫性が認められる。このような一貫性は、『酔翁談録』の編者が、自分なりの封陟像を造形しようという意図のもとに増補を行ったことを示すものである。

増補に現れた封陟像は、原作の封陟像と大きく異なったものになっている。原作の封陟は、次のように、山中に住み書物を読み耽っている人物と冒頭に紹介されている。

12) 志在典墳，僻於林藪，探義而星歸腐草。

また彼は、仙女から結婚を申し込まれると、次のように、女性などに興味がないと断わっている。

13) 某身居山藪，志已顛蒙。不識鉛華，豈知女色。

また仙女の侍者も、封陟のことを、

14) 此木偶人，不足與語。

と言っている。

このように、原作の封陟は、山中に隠棲している、浮世離れした人物として造形されており、増補に現れた封陟のように、道徳に固執する人物ではない。増補の中の封陟は、道徳に固執している、言い替えると、人間社会の内で正しく生きることにこだわる人物であるので、山中に隠棲もしている、言い替えると人間社会の外に出て生きているという原作の封陟像と調和しない。『類・封』と『酔・封』では、例12、13、14が全て削除されている。『類・封』がこれらの箇所を削除しているので、『酔翁談録』の編者が見たテキストも、この例12以下の文を既に削除していたと予想される。もし『酔翁談録』の編者が見たテキストに例12以下の文もあったならば、彼はそれらの文を削除して、封陟を道徳に固執する人物として造形したであろうか、あるいは別の人物像を作り上げたのであろうか。興味ある問題ではあるが、『封陟』の改作のみからは、推測することはむずかしい。ただし、『類・封』も『酔・封』も、封陟が山中に住み書物を読み耽っているという箇所こそ無いが、山中（少室山）に住んでいるという場面設定だけは、原作からそのまま受け継いでいる（例5参照）。これを見ると、原作を改作するに当たり、細部の整合性までは気を配っていないように思われる。

最後に『酔翁談録』の編者が、封陟という主人公の道徳的潔癖さを強調しようとしたのは、どのような意図から出たものなのかを考えてみたい。

『封陟』は他の三編、『趙旭』・『張雲容』・『郭翰』とともに『酔翁談録』の「遇仙奇会」という項目の下に収められている。この四編を読み較べてみると、

封陟は他の「遇仙奇会」の主人公三人と対照的な行動をとっている。まず四編中、主人公が仙女の求婚を拒絶し、しかも詩を作らなかったのは『封陟』のみである。『趙旭』・『張雲容』・『郭翰』の主人公は、皆この世の人ではない女性と交際し、詩の贈答もしている。また『趙旭』と『張雲容』の主人公は、その女性と結ばれている。但し四編の主人公のこの行動は、『醉翁談録』に至って新たに書き改められたのではなく、原作からそのまま受け継いだものである。

「遇仙奇会」では、この対照的な行動をとる主人公達を、“有仙風道骨”、“無仙風道骨”と対比している。

『醉・封』は、本文のあとに“醉翁曰”ではじまる批評が付されている。その中で封陟は「仙風道骨」が無いと評されている。

15) 以常人之情，遭遇仙女，恨不得與爲耦。封陟執德不回，終不屑就，誠若可愛。然細而思之，實無仙風道骨，是故執一而不通也。可惜乎哉。

他の二例は、『趙旭』と『張雲容』の本文中にある。

『趙旭』では仙女（青童君）の台詞中に見える。

16) 太：女乃笑曰：「君宿世有道骨，法應仙（以下略）」

醉：女乃笑曰：「君有仙風道骨（以下略）」

これは『太平広記』でも、“宿世有道骨”となっている。主人公趙旭は“習黄帝，老子之道”と物語の冒頭に紹介されており、確かに“道骨”がありそうな人物である。なお、『趙旭』は『類説』と『緑窓新話』に収められていない。

『張雲容』では次のようになっている。

17) 太：有客田山叟者。或云數百歳矣。素與昭洽。（70字略）贈藥一粒曰（以下略）

醉：有田山叟者，見昭有道骨，贈藥一粒曰（以下略）

類：有田山叟，贈藥一粒曰（以下略）

例17で『太平広記』の70字略とした箇所は，“有道骨”と無縁の話である。省略した箇所の概要は、

田山叟が薛昭に海東まで同行すると言い、薛昭は結局これを許す。田山叟は途中護送役人を酒で酔わせて薛昭を逃そうとする。

とあって“贈藥一粒曰”に続く。『醉・封』では，“有田山叟者”と“贈藥一粒”の間に、田山叟が、なぜ薛昭に薬を与えたかを説明する文“見昭有道骨”が挿入されている。これは、『類説』に見えない。『醉翁談録』の編者は『類説』に近いテキストを見ていたと予想されるので、この“見昭有道骨”は、『醉翁談録』に於て増補されたものと思われる。

既に確認したように、対照的に見える主人公像は、原作の段階から受け継いだものもある。『酔翁談録』の編者が利用したテキストの段階で、既に「遇仙奇会」の四編を一箇所に集めてあったのか、あるいは『酔翁談録』の編者が、自らこの四編を一箇所に集めたのか、いったいどちらであったのかは、今のところ不明である。しかし、四編の対照的な主人公を、“仙風道骨”の有無として捉えたのが、『酔翁談録』の編者であることはほぼ間違いが無い。『酔・封』の増補に於て、一貫して主人公の道徳的に潔癖な性格が強調されていることは既に述べた。増補にこのような一貫した努力が見られるのは、『酔翁談録』の編者に、“無仙風道骨”な封陟と“有仙風道骨”な他の主人公との対照をより明瞭にしようという意図があったためであろう。

また、例15によれば、『酔翁談録』の編者は、“無仙風道骨”な封陟を、普通の人間に較べれば立派だと言っているものの、“有仙風道骨”な人物ほどには評価していない。封陟の道徳的潔癖さが、全面的に称賛されているわけではない。『酔翁談録』の編者が封陟のために随分と力みかえった台詞を補っているのは、封陟を「仙風道骨」の無い人物、立派かも知れないが融通のきかない人物として造形しようという意図からでたものであったと考えられる。

IV 古い層と新しい層

『封陟』の本文対照から、『酔翁談録』の編者の改作方法には、次のような特色が見られる。改作にあたり、利用したテキストの文章を使えるときはそのまま用い、必要などろだけ書き換えたり、付け足したりしている。そして、もともとあった文章と、新たに付け加えた文章との間の一貫性について、周到な注意をはらっているとは言い難い⁴⁾。このため、もともとある文章と、『酔翁談録』の編者が改作した文章との間に整合性を欠くこともある。これは比喩的な言い方をすれば、古い層と新しい層の間に存在する断層である。『封陟』を見る限りで、この断層は、作品の周辺部に起こり易く、中心部には起こりにくい。つまり、改作は台詞や各場面のはじめと終りに多い。増補もこの例外でないことは、例8～例11を参照されたい。

今後『封陟』以外の作品についても、本文の対照によって、改作がどのように行われるのかを調査すれば、作品の内容がどのように変わったかばかりでなく、改作によって発生する断層についての知識も増加するはずである。そうすれば、やがて、対照すべき本文の無い作品について、断層と考えられる箇所を推定し、そこから逆に作品のもとの内容が、どのように変えられたかを予想す

ることも可能になるであろう。

1991年2月28日 初稿

1991年4月30日 改稿

注

- 1) 「話本」と種本、種本と原作の間の相違に注意すべきであることを、はじめに指摘したのは、大塚秀高氏（「話本と通俗類書」『日本中国学会報』第28集1976）である。
- 2) 例えば、『太平広記』と『醉翁談録』の双方に収められている作品の一つに『柳毅』がある。その『柳毅』の後半に、『醉翁談録』の本文と『太平広記』の本文と一致しない箇所が数箇所ある。ところがこの箇所の『醉翁談録』の本文は、中華書局本『太平広記』の校注に引く明鈔本（野竹斎鈔本）の本文と一致している。これは、『醉翁談録』の編者が見たテキストが、これらの箇所については明鈔本と同じであったことを示している。
- 3) 『封陟』の本文対照表は、『筑波中国文化論叢』10（1991年3月）に発表した。
- 4) 周楞伽氏が指摘しているように、文体も原作と増補された文章の間で違いがあるように思われる。周楞伽輯注『裴鋼传奇』（上海古籍出版社 1980）p. 68。

（筑波大学）